

高岡市女性プラン情報誌

6 号 1999年10月

ありーて

もくじ

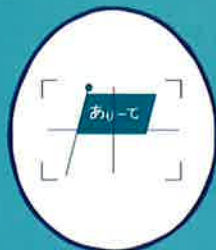
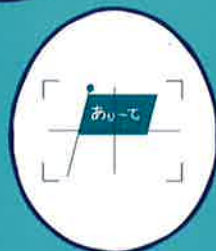
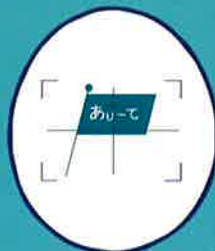
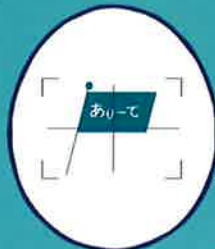
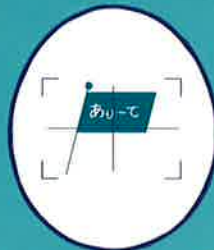
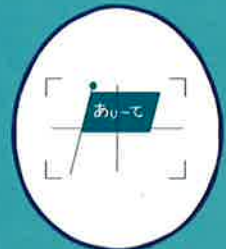
特集 ちかごろきになるきーワード

～女性学とわたしの関係を少しだけ解説した小辞典～

セピア色の写真から

『DO』から学ぶ

BOOK紹介



「ありーて」は、自分の方で問題解決していくイギリスの童話の主人公の名前です。「私の未来は私が創る」とありーてはいいます。

近年の世界的な男女平等の流れに後押しされて、日本でも、「男女共同参画社会基本法」が6月から施行されるなど、21世紀へ向けての「男女共同参画社会」づくりが動き出したようにみえます。

「女性問題」を解決するための学問—女性学—も、女性学関連講座を置く大学、短大が相次ぎ、女性センターや民間においての講座の開講や学習支援制度が整いはじめる等、市民権を得てきました。「女性問題」とは、女性が社会や家庭において女性であるというだけで、個人としての権利を尊重されず、程度の差はあるにしても生きづらいつと感じている状況のことです。また、マスメディアでも「ジェンダー」「エンパワメント」など女性学に関係した「言葉」が取り上げられることが増えてきました。カナナ語で意味がわかりにくいのですが、日本語にはこれらの言葉を表す適切な単語がないので、そのまま使われています。これらの言葉は、私たちの生き方や毎日の生活の中で起きている問題を左右する「キーワード」です。

今回の特集は、そんな「言葉」をいくつか集めて、「ありて」ならではの解説を試みてみました。これらの「キーワード」やその中核をなす考え方を確認することで、あなたが自分自身を見つめ直してみるきっかけになれば、と思います。



ちかごろきになる キーワード

～ 女性学とわたしの関係を少しだけ解説した小辞典～

家族 family

あるテレビ番組で100日間、午後7時に家族揃って「いただきます」を言えたら賞金がもらえるという企画をやっていた。誰かが遅れそうになったり、食事の支度が間に合わなかったりと、その経過を面白おかしく見せるわけだが、図らずも、現在では家族揃って食事をとることがいかに大変かということを表す結果となった。

家庭は私的な場とはいいながら社会と無関係にあるわけではなく、むしろ社会の有り様が家族の形態を変えてきたのではないか。食事時に家族全員が揃わないことも、大都市への人口集中による住宅事情、交通網の発達による通勤距離の大幅な延長など、社会的な要因が大きい。

また、単身赴任や離婚などによる「ひとり親的家庭」がそう珍しいことではない状況では、一つ家に両親と祖父母と子どもたちが住むという、いわゆる一般的な家族像も、もはや現実的ではないといえよう。このところ話題になっている「グループホーム」のような血

のつながらない人達が集まって暮らす形、法的な結婚形態を選択しない夫婦、姉妹兄弟だけの家族、様々に多様化していく家族形態は、やはり今の社会の姿を映す鏡でもある。それでもなお旧来の家族像をよしとする考え方に立ち、その責任の多くを女性、特に母親に求めようとする風潮がないわけではない。しかし、大切なのは形ではなく、そこに住む人達が、無理なく心地よく暮らしていくことこそが最も重要なことではないかと思う。





リプロダクティブヘルス/ライツ (性と生殖に関する健康と権利)



ある人が子宮筋腫の手術をしたところ、知人から「手術をすると更年期が早くなるそうだけど大丈夫?」と聞かれたそうです。これは医学的に何の根拠もないことなのに。また、出産に関しても、人の誕生という輝かしい場面であるはずなのに、産褥など暗く隠微な言い回しが未だに使われています。

こと性や生殖に関することとなると、自分の体に直接関わりのあることなのに、思い込みや昔からの言い伝えにとらわれてしまうのはなぜなのでしょう。長い歴史の中で形作られてきたことはいえ、医学や科学が発達し、避妊技術も飛躍的に進歩した現在、未だに性や生殖を闇の中に押し込めておくことはないはず

です。性や生殖を自分の生涯を通しての健康という視点から見れば、大切なことであると同時に、生き方、ライ

フスタイルそのものにも深く関連してくることです。安全で満足できる性生活を営みつつ、子どもを何人産むのか、産まないのかといったことを決めるのは、わたし自身が持つている権利です。自分のからだを大切に考え、自分の生き方を尊重するために、もう少し自分のからだやこころを見つめ直してみる必要があるのではないのでしょうか。

ジェンダー gender

「ひととは女に生まれない。女になるのだ」フランスの女性哲学者シモーヌ・ド・ボエヴオワールの有名な言葉である。『第二の性』男女の相違は、生物学的性差によるものと、文化的・社会的とりきめによるものがある。後者がボーヴォワールの言葉が示すものである。

身近な例を考えてみよう。あなたの娘が、車のおもちゃやロボットが欲しい、と言った場面を想像してほしい。あなたはとうするだろう? 何の疑問もなく買い与えるか、それとも、「女の子なんだから」と言っ

だろうか。

私たちは、日常生活において、無意識のうちに「女だから」「男だから」といった選別をしている。それは、既に社会の中で習慣化され、当然のことと思いつまされてきた。特に疑問を感じることもなく見過ごされてきたのである。こうして私たちは、社会や文化が作り上げてきた女性的・男性的な行動や態度といったとりきめの枠の中に自らを当てはめてきた。しかし、ジェンダーという考え方は、それに疑問を投げかける。

「私が私であること」、それは社会や文化のとりきめに縛られる存在ではないのではないか? ジェンダーとは、もう一度、自分自身を見つめ直すためのキーワードとも言える。



エンパワメント empowerment



一般的には「力をつけること」と訳されることが多く、女性が力をつけて男性に並ぶことと解釈されている向きもあるように思えます。本来の意味は、もともと持っている力を目覚めさせ伸ばしていくこと、そのことにより、人生を充実させ自己実現のための力をつけていくことなのです。

私たちは、生まれながらにして、それぞれの人にはない特質を持っているはずなのですが、では、どうしてその力を発揮できずにいるのでしょうか。「絵を描くのが苦手」「人前で話すのはどうも」「優柔不断で判断力がなくて」本当にそうでしょうか。小さい頃、3歳とか4歳のころ、自分をそんな風感じていたでしょうか。描きたいように絵を描き、音程がはずれていても大きな声で歌を歌っていたのではありませんか？いつの間にか描くことも歌うこともしなくなったのはなぜでしょうか。何が私たちの中の「自分」を閉じ込

めてしまったのでしょうか。

「女の子らしくないさい」「もう小学生だから」「お兄ちゃんなんだから」：「らしさ」を押しつけられている内に見失ってしまった自分を再発見し、自分はこれでいいんだという自信を取り戻し、生きていく力を培っていくこと、それがエンパワメントということなのです。

※注 一般的には「エンパワメント」が使われています。

就業における男女の共同参画

就業における女性の実状をみるものの中に、年齢別労働力率があります。日本の場合は結婚、育児により一時的に労働力率が落ちこむM字曲線を描きます。これは、結婚、出産に伴い、家事・育児は女性が担うものという考え方や、仕事を続けたくても、家事・育児の両立が難しいために仕事を辞める女性が多いことをあらわしています。

確かに、労働力率を約20年前と比べるとM字の底は浅くなってきてい

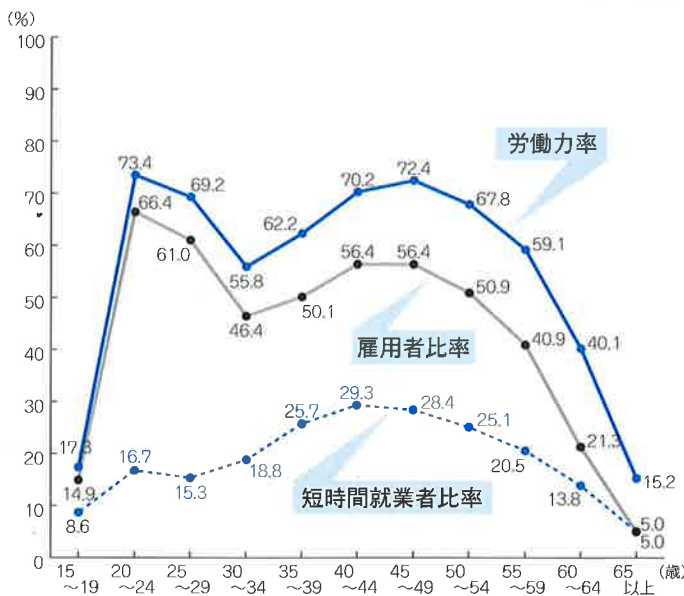
ますが、

この労働力率に雇用者比率、短時間就業者（主にパート労働者）比率を重ねてみると、別の課題が見えてきます。雇用者比率の底になる30～34歳から短時間就業者比率が上昇し、40～44歳、45～49歳がピークとなります。



これは、家事・育児と両立のためにパートを選択することもあるでしょうが、一度職場を離れると、フルタイムでの再就職が難しいことも考えられます。さらに、別の見方で約20年前と比べると、M字の底が25～29歳から30～34歳に移動しています。結婚年齢、第1子出産年齢が上がっていることも見て取れるのです。これは、加速する少子高齢化と密接に関わる現象と言われています。

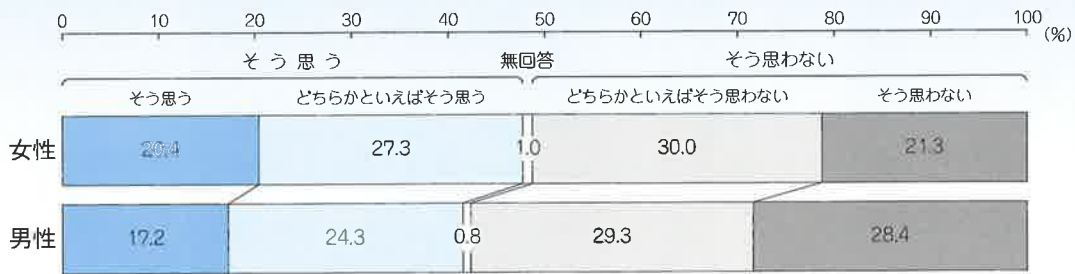
女性の年齢別就業状況 (平成10年)



- 注：(1) 労働力率はそれぞれの年齢階層における労働力人口／人口
 (2) 雇用者比率はそれぞれの年齢階層における非農林業雇用者数／人口
 (3) 短時間就業者比率はそれぞれの年齢階層における非農林業の週平均就業時間35時間未満従業者人口

資料出所：総務庁「労働力調査」

「電車内などで、週刊誌のヌード写真やスポーツ新聞のポルノ記事を広げたりすることは、女性に対する人権侵害である」という意見について（男女別）



資料出所：東京都生活文化局『「女性に対する暴力」調査報告書』（平成10年3月）により作成

メディア・リテラシー media literacy

職場や地域、その他社会のあらゆる場への女性の参画を進めるためには、育児支援、介護支援等がどこまで整備されるかは重要な課題であり、改正男女雇用機会均等法、続いて男女共同参画社会基本法が施行されましたが、何よりも、社会全体の意識改革なしには実現しえないでしょう。

リテラシーとは、読み書きの能力という意味である。では、メディアを読み書きするとはどういうことなのだろうか。

女性雑誌を考えてみましょう。多くの女性雑誌。特集と云えばファッション、ダイエツト、ゴシップ、そして恋愛、結婚。何十年も

前に、男性が女性に抱いたイメージから今も抜け出していない情報の数々。そして、そこで表現される「女らしさ」。これらは、今の女性の姿やそれを取り巻く社会をありのまま描いているとはいえず、こうあってほしい、こうあるべきという社

会—ほとんど男性で構成された編集者やメディア—の希望や思い込みを体現したものと云っていいのではないだろうか。

このように、メディアからの情報は、膨大な現実・情報の中から、あくまで送り手の視点で切り取り、再構成された意図的なものである。全ての情報を批判的にとらえる必要はないが、問題は、送り手の姿勢や視点がどこにあるかである。このことを受け手の私たちが認識し、積極的に読み取り、解釈し、批判する力、姿勢がメディア・リテラシーなのである。

テレビドラマやコマーシャル等も、ステレオタイプ（型通り、固定観念）化したイメージや固定的な「らしさ」を発信続けている。メディアの情報を、距離を持って受け止め、解釈し、さらに、メディアを表現方法として積極的に活用していくことを考えていく時期にきているのではないだろうか。

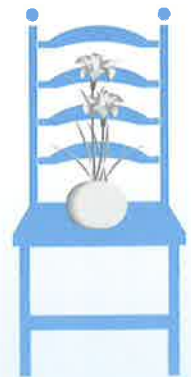


言葉が単に物や事象を表す記号であるならば、私たちは人の言葉に傷ついたり、感銘を受けたりするでしょうか。

言葉には、発した人の感情や考え、哲学までが含まれていて、それも伝わるからではないかと思いません。また、公の場で使われる言葉も、その背景にあるシステムや思想を反映しています。

現在、国や自治体では、そこで使われる言葉の見直しが進んできています。婦人↓女性、保母↓保育士、寮母↓介護士のように。実態が変わらないのにただ言葉だけ変わってもという批判もありますが、しかし、これは少しずつ社会が変化してきている証ではないかと思えます。

言葉を変えていくことは、やはり現実を変えていく力になると思えます。新しい言葉は新しい思想を連れてくるのだと思えます。



セピア色の写真から

—好きな道一筋—

堀 妙仙さん



堀さんは1908年生まれの91歳。長く、茶道、華道を教えてこられて今、「好きなことをしてきただけですちゃ。」そう振り返られます。

茶道、華道との出会い

堀さんは、大門町水戸田の農家の生まれで、数え年9歳のころ、養子先の光暁寺に入られました。その経緯を、当時、生家に不幸が続き、「家族の内の一人が仏門に入れば幸せが訪れるから」と言い聞かされてきたそうです。光暁寺に入っ

てからは、尼僧の修行のために氷見市上日寺の弟子となり、更に宗立尼衆学院（高岡市内の総持寺に併設）に学び、そこで茶道、華道の手ほどきを受けました。その後、華道芸術学園で華道を学び、茶道は在田宗貴氏（故人）の直門弟子となります。今でも宗貴氏を師として大変に尊敬されており、その話ぶりからは、当時の師弟関係の厳しき、繋がりの深さが感じられます。

道を究める

光暁寺は、母となる尼僧とその妹がしっかりと切り盛りしていたため、寺のことにはほとんど関わらず、茶道・華道一筋の毎日であったそうです。

1950年に茶道裏千家教授となる一方、51年には華道芸術学園を卒業して講師となり、更に53年、それまでの未生流から嵯峨御流に転流という転機が訪れます。嵯峨御流は、嵯峨天皇の離宮であった大覚寺を中心に伝わるもので、当時の北陸にはほとんど普及していない流派でしたが、きっかけは、上日寺の住職が大覚寺門跡と友人であり、上日寺で門跡と出会い、転流を望まれたことであつたそ

うです。

既に、社中を持つ門弟数十名を抱える堀さんとしては、ずいぶん思い切った決断であつたに違いありません。嵯峨御流富山司所を結社し、いよいよ、茶道、華道の普及に邁進することとなります。教室は、高岡を中心に富山から氷見まで数十を数え、文化教室や会社のクラブ活動へと、自動車が普及する前は、国鉄を乗り継いでの東奔西走の日々であつたそうです。

稽古は「柔らかく、厳しく」を旨とし、言葉は柔らかく指導は厳しく、茶の心、心の在りようを伝えることを最も大切にされてきたとのこと。先を急ぐ弟子の気持ちとは別に、一つの立ち居振る舞いを身につけるために同じ稽古が延々と何ヶ月も続くこともあれば、また、



気配りを大切にすることはもちろんですが、一方、相手が望んでもいないことを手前勝手にすること、を嫌ひ、厳しく注意されたことも有りました、と弟子達は當時を語ります。稽古を離れた所では優しく、時には冗談を言うこともありましたが、いったん水屋（お茶事の準備をするところ）に入ると表情は変わり、手前をする姿は凛として、茶の心を表現しているかのようであつたとか。

茶を楽しむ人を慈しむ

昨年まで出稽古をしていた堀さんも、現在では週に一度、自宅に釜を掛けるだけとなっています。その日は、午前中は生徒に教えながら修行を積む人達が、午後は一般の弟子が訪ねてきます。同居している養子夫妻が、当人が人と会うことを楽しみしているので、話し相手にでも誘ったつもりが、弟子たちは、話をする楽しみとは別に、やはり稽古をつけていただくという気持ちで訪れるそうです。

「今までになさつてきたことを教えて下さい」と問いかけると、「特別なことはなんもしとらん。ただ、好きなことだけをしてきただけですちゃ。幸せもんです。」と仰るだけです。

お話を聞いている時の堀さんは、弟子たちから聞いている厳しい先生の姿ではなく、簡素な暮らしぶりではあるが、養子夫婦と孫に囲まれて、何時もニコニコとして毎日の生活の一つ一つを楽しんでいるように見受けられます。好きな道一筋に生きてこられた幸せ、才能を出し切つた充実の日々の後の、穏やかで満ち足りた、見事な老いと感じました。

「買物」から学ぶ「買心」

ちよっと前、「買い物しすぎる女たち」

という本が話題になったことがあります。日々のストレスや心のもやもやから逃れるために「買い物」という行為に依存する女性たちのことを取り上げた本でした。確かに「買う」「お金を使う」という行為は一種の快感を伴います。買い物をしたあとで「なんでこんなモノ買ったんだろう」と後悔したことはありませんか？

ある女の人は、仕事帰りになんだか真っ直ぐに家に向かう気にならなくて、スーパーに寄って、たいてい必要と思わないモノを買ってしまうと言っていました。また、他の女の人は、休日にデパートに行って、いろんな売り場をぐるぐる回っては「あ、こんなのいいな」「これはあったら便利かもしれない」なんて見ているんだけど、結局疲れてしまつて食品売場で夕食のお惣菜を買って帰ってくる、と話していました。そして、二人ともそんな自分にちよっと後ろめたさや自責の念を感じているようです。

もう一人の女の人は、今日はガンパツタなと思ったり、いろんなことでストレスを感じてイライラしているときに、自分にちよっとした贈り物を買つと話してくれました。おいしいケーキを一つだけ、いつもより100円高いストッキング、買おうかどうしようか迷っていた本、洒落た瓶に入ったワイン、ささやかな贅沢だけ

ど、心がちよっとだけうきうきするのよね、と彼女は少し照れながら話してくれました。

今の社会で「買い物」しないで生きいくのはとっても困難ですよ。では、前の二人が感じている後ろめたさはどこからくるのでしょうか。「つましく家計を切り盛りするのが妻のつとめ」、案外そんな思い込みが彼女たちをちくりと刺していたのかもしれない。そして、後ろめたさを感じれば感じるほど「買い物」という行為から逃げられなくなっていくります。

「贈り物の彼女」が買う「贈り物」はあまり役に立たないように見えて、今の彼女には必要なものかもしれません。前の二人も、「買い物」をすることで気持ち切り替えたり、ストレスを消していたのかもしれない。「消費は美德」なんて思いませんが、気持ちのバランスをとるためにするちよっとした買い物、そんなに悪いことだとは思えないのです。

スポーツや芸術は生活を豊かにしてくれます。いろんなボランティアや地域活動にいっききとしてい人もいます。でも、心の隙間を「買い物」で埋めている彼女たちを責める気にはなれません。それは、私の中にもあり、そして今の社会のあり方そのものだと思うからです。

こんにちは 女性行政室です

～ 男女共同参画社会基本法の施行 ～

平成11年6月23日、男性も女性も職場や家庭、地域など社会のあらゆる分野において対等な立場で参画し、利益も責任も平等に分ち合う社会を目指して「男女共同参画社会基本法」が施行されました。

この「基本法」は、男女共同参画社会を形成するための基礎・土台となる様々な取組を、総合的かつ計画的に推進するために制定されたものです。少子高齢化の進展、国内経済活動の成熟化など社会経済情勢の変化に対応していく上で、男女共同参画社会の実現は21世紀の最重要課題、と位置づけています。

この「基本法」の理念・趣旨がさまざまな分野に広がり、この法律をもとに個別法ができたり、制度や慣行を見直す動きが出てくることを期待しながら、問題解決のために積極的にかかわっていききたいものです。

高岡市は、この基本理念にのっとり、2001年を起点とする新しいプランの策定にとりかかりました。

男女共同参画社会基本法

基本理念

1. 男女の人権の尊重
2. 社会における制度等についての配慮
3. 施策等の立案及び決定への共同参画
4. 家庭生活における活動と他の活動の両立
5. 国際的協調

責 務

【 国 】	【地方自治体】	【国民】
基本理念を踏まえた施策（いわゆる*ポジティブアクションを含む）の総合的な策定・実施の責務	国の施策に準じた施策及び区域の特性に応じた施策の策定・実施の責務	男女共同参画社会の形成に寄与するように努める責務

施策の基本となる事項

- 政府の男女共同参画基本計画の策定の義務
- 都道府県男女共同参画計画の策定の義務
- 市町村男女共同参画計画の策定の努力義務
- 法制上または財政上の措置
- 年次報告等
- 施策の策定等に当たっての配慮
- 国民の理解の促進
- 苦情の処理等
- 調査研究
- 国際的協調のための措置
- 地方公共団体及び民間の団体に対する支援

男女共同参画社会の形成

男女が社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ共に責任を担うべき社会

*ポジティブアクション（積極的改善措置）：
男女の格差を改善するため必要な範囲において、男女のいずれか一方に対し、活動の機会を積極的に提供すること。

■ 私たちは繁殖している (1~3巻)

内田春菊 著／ぶんか社

著者の出産と育児の経験をもとに、人間が子どもを産み育てるということを真正面からとらえた作品。

いわゆる役に立つ育児マンガではないし、過激と受け取る人もあるだろう。著者自身、これはフィクションであり、あくまでも自分自身の体験なので、役立つものと期待されたり、真似されても困る、と言っている。しかし、題名に繁殖という言葉を使っているように、子どもを宿り、産み育てるという行為は生半可なきれいごとではなく、もっと根源的な問題、生き物としての原初的行為であることをストレートに訴えかけてくる。どんなに小さな赤ちゃんでも、私たちと同じ人間であり、生命であることを再認識させてくれる。

コトツクから

“読書の秋”です。たまにはのんびりリラックスして、マンガならではの豊かで独創的な表現の世界を楽しんでみませんか？ということで、今回は“子育て”や“家族”“老い”という身近なテーマの作品を紹介します。



■ Papa told me (1~22巻)

榛野なな恵 著／集英社

「お父さん、女の子はピンクのヒラヒラを着るっていう固定観念を捨ててほしい。」主人公の小学生、知世ちゃん言葉である。父親と二人暮らしの彼女は、〈自由に創造的な父子家庭〉をめざし、毎日が冒険、といわんばかりに好奇心いっぱいの瞳で日常をみつめる。曇ることのない彼女の視線は、私たちが何気なく使う言葉、当たり前前と思っている事柄にささやかな疑問を投げかける。そして彼女はこう言うのだ。「私たちはショートケーキの苺の飾りじゃないの！」

■ 八月に生まれる子供「ロストハウス」より

大島弓子 著／角川書店

主人公種山びわ子は、大学1年の夏休みをどう過ごそうかとわくわくしている18歳。そんな彼女が、奇病によって突然老人と化してしまう。急激に物忘れがひどくなり、体が思うように動かなくなっていく。日々強くなる戸惑いと不安、孤独の中、彼女は老いをどのように受け入れ、生きる

ことへの希望を見出していくのかが、著者特有のファンタジックで優しい絵とせつないけれどもユーマに溢れた言葉で綴られる。

悩み、苦しみがながらも潔く、そしてどこか楽天的に“老い”と共存していく彼女の姿は、私たちに微かだが明瞭な希望の光を投げかけてくれる。



この情報誌に対する
ご意見・ご感想を
お待ちしております。



編集後記

私たちが作る「ありーて」も早くも折り返し地点。今回の特集は初心に帰り、もう一度「ありーて」を、そして私自身を見つめる良い機会になりました。皆さんは、どう感じられましたか？ ぜひ、ご感想を！

朴木 聖乃

発行／高岡市企画調整部女性行政室

〒933-8601 高岡市広小路7-50

電話／0766-20-1262 FAX／0766-20-1661